

追悼 小西行郎先生を悼んで

2019年9月5日、日本子ども学会理事であり、本学会の発展に創設期よりご尽力いただいた小西行郎先生が逝去されました。先生の生前のご厚誼に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



小西行郎（こにし・ゆくお）

1947年10月8日-2019年9月5日。香川県生まれ。医学博士。小児科医。京都大学医学部卒業後、同大学付属病院未熟児センター助手。1983年より福井医科大学、1999年より埼玉医科大学、2001年より東京女子医科大学を経て2008年より同志社大学赤ちゃん学研究センター長。日本赤ちゃん学会理事長。日本子ども学会理事。2001年に小林登日本子ども学会名誉理事長（東京大学名誉教授）とともに、日本赤ちゃん学会」を創設。2003年の「日本子ども学会」創設にも深く寄与した。著書に『今なぜ発達行動学なのかー胎児期からの行動メカニズム』（診断と治療社）、「運動・遊び・音楽ー赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育（共著）」（中央法規出版）など多数。



《 小西先生へ 》

■子ども学会と同じく小林登先生が創設された赤ちゃん学会の理事長の経験を日本子ども学会の運営にも生かしていただくために、創立時より理事として加わっていただきありがとうございました。小児科医として、子どもの疾患の治療だけでなく、子どもの発達全般にかかる該博な知識と、発達心理学、脳科学、ロボット工学など幅広い知識と人脈をお持ちの小西先生のおかげで、日本子ども学会も赤ちゃん学会の後を追いつつながら、少しずつ地に根をはった学会として成長することができました。

先生はあの包み込むような笑顔と優しい口調で、問題の本質を射抜くような発言をされながら、子どもの発達に関する基礎的研究や臨床、さらには社会的な問題について、いつも私たちのリーダーとして先頭をきってこられました。

女子医大退官後も基礎研究への情熱の火を絶やすことなく、新たに同志社大学に赤ちゃん学研究所を立ち上げ、さらに近年では理化学研究所のユニットリーダーとして、自閉症や睡眠の研究の第一線を走り続けてこられました。

私事になりますが、私にとって小西先生は、小児神経学会、子どもの発達コホート研究、アプリカ寄附講座、NHK子どもに良い放送プロジェクト等、多くの場で苦楽をともにした僚友でした。さらに赤ちゃん学会、子ども学会の立ち上げ時も、小林登先生のもとで汗を流した仲間です。

私が小西先生の性格で好きだったのは、一つは子どもと仲間への優しさですが、それ以上に決して権威に屈しない意志の強さでした。若い頃、ある学会でその特質が遺憾なく発揮されました。学会の制度改革の先頭に立ち、当時の執行部から小西先生と私ともう1人の若手評議員が「学会の3悪人」と呼ばれたことも、今となっては懐かしい思い出です。その後、学会の理事や学会誌の委員長として、編集委員会の民主化などの大きな功績を残されました。そうし

た多彩な研究と活動の集大成の時期にさしかかったまさにその時に、その歩みを止めなくてはならないことになったことは、悔やんでも悔やみきれません。いや、やさしい小西先生ですから、「いいよ、俺がやらなくても誰かがやるよ」と微笑んでおられるのかもしれませんが。ご冥福をお祈りします。

榊原洋一（日本子ども学会理事長）

■突然の訃報におどろいて、まだ信じられない気持ちです。先生とは赤ちゃん学会でいろいろ一緒に仕事できたことを大変嬉しく思っておりました。ロボットでも「きわもの」の浅田でしたが、赤ちゃんや子どもの発達に対する温かい眼差しが研究面でも溢れており、それがまだまだ未熟なロボットに励ましとなりました。赤ちゃん学会のことはかかになります。浅田が2017年、ベビーサイエンス編集委員長を拝命したときの最初の特集を会長自ら「日本赤ちゃん学会の18年を展望する」記事を執筆いただきました。本来なら20年が区切りなのですが、結果として、それがいただいた最後の原稿となりました。長年、ご苦勞さまでした。ありがとうございました。

浅田 稔（大阪大学先導的学際研究機構 共生知能システム研究センター）

■小西先生と小林先生が日本赤ちゃん学会を立ち上げました。私は、その頃 NHK のディレクターで、その後も赤ちゃんに関する仕事をして来ました。赤ちゃんは不思議な存在、出産直後の赤ちゃんも一人の立派な人間なのだと思います。

小西先生は1989年、オランダのフローニンゲン大学にて発達行動学を学ばれました。私は、どうしてもオランダ・フローニンゲン大学、イギリス・オックスフォード大学付属病院、ドイツ、アメリカに行きたいと思い、その地を訪ねました。小西先生がいらっしゃったことで、今ある私がおります。

一色伸夫（子どもメディア研究所所長）

■小西先生、本当にありがとうございました。いつもどんな話のときも、「うん?、なに?」と耳を傾けていただいていた先輩が急にいなくなったことは、私にとっても言いようのない寂しさをこころの中に残している。先生とは、かれこれ30年以上にわたって一緒に研究をさせていただいた。その中でもJSTのコホート研究は、日本では実現が難しいと言われていた大規模追跡研究を現実のものとした、小西先生だからできた大事業であった。その時に作られた「子ども発達科学研究センター」は、15年にわたって子どもの追跡を続けている。

ようやく先生が考えていた、世代間伝達や情動と環境との関係などの研究成果が現れようとしている。たまに会ったときに、「あそう。がんばりや」と笑いながら励ましてくれた小西先生の顔がそこにあるように感じる。先生がスタートさせた研究の成果をぜひ見ていただきたいかった。本当に残念です。ありがとうございました。

河合優年 (武庫川女子大学子ども発達科学研究センター)

■ご出演のNHK「すくすく子育て」をはじめ、小西先生のメッセージには、「赤ちゃんって、なんておもしろいんだろう! もっと好きになっちゃう!!」と思わずにいられない「魔法」がありました。

「(何でも頭にかぶる子どもの行動に関して) 赤ちゃんもおかあさんを試してみているのかも。…たまには、赤ちゃんの立場になってやってみるのもいいですね。そうすると、赤ちゃんも『ちょっとうちのおかあさん、話ができるかなり』と(笑)。「(赤ちゃんに対して) けっこうイタズラしてあげるのも手。例えば、手を握って離さないでいてみたりね。」

赤ちゃんとのやり取りのなかで、しぐさや表情をどう受け取っていけばよいのか、どうすればもっと気持ちが分かりやすくなるのか、ユーモアたっぷりに教えてくださった小西先生。ほんとうに本当にありがとうございました!

坂上浩子 (NHKエデュケーショナル)

■私が先生とお出会いは、日本赤ちゃん学会が設立した年になります。当時、子どもたちのセラピーに行き詰っていた私に、施設長であった高谷清先生が東京女子医大乳児行動発達学講座に僕の後輩がいるから訪ねてみなさいと言われたのが最初でした。先生からは、高谷先生に出会ったことで小児科医になったこと、プレヒテル教授との出会いがきっかけのパラダイムシフトが起こったこと、今の小児リハビリテーション変えなければいけないことなどたくさ

んの示唆をいただきました。

7月15日にお見舞いに行ったとき、「高塩君、自分の体がこうなって自分で動くこと、動けるようになってくることが、こんなに嬉しいものなのだと身にしみて感じたよ。子どもたちが自らの意思で動くことができる電動移動機器を全国に普及させなさい」とおっしゃっていました。8日の告別式の日、お見舞いに伺う予定であったのに……。またご報告に伺いますので待っててください。

高塩純一 (びわこ学園医療福祉センター草津)

■第1回日本赤ちゃん学会2日目の朝、前日のNHKニュースを見て、赤ちゃんを抱っこした母親たちが会場にやってきました。小西先生は「えらいこっちゃ…」と困ったような、でも嬉しいような顔をされていましたね。それから、学会のサイトをつくって講演録を載せたり、レビューと議論を中心にした学会誌を発刊したり、ついには国際赤ちゃん学会を日本で初開催! 赤ちゃん学立ち上げの怒涛の数年をCRN担当者としてお手伝いできたことは、いまでも関係で仕事を続ける私の原動力になっています。

先生は、今日的な子どもの問題にいつも向き合っていました。特に、睡眠やゲームなど社会環境が深く要因にある問題については「子どもが壊れてしまう」と怒っていました。「Children at risk (危機にある子どもたち)」に対し、「子ども学」はどうか貢献できるのか、これからもしっかり考え続けていきます。

所 真里子 (元チャイルド・リサーチ・ネット研究員)

■小西先生の突然のご逝去に接し、心からお悔やみ申し上げます。赤ちゃん学研究センターに学生と伺った際にも大変お世話になりました。亡くなられる1年前に、同志社大学赤ちゃん学研究センターと、同じ法人である同志社女子大学現在こども学科との連携をと声をかけていただき、話し合いの場を持つことをとても楽しみにしていました。お具合が悪いとのことでしたので、お元氣になられたら、またお目にかかれると心待ちにしておりました。

小西先生は人と人をつなぐ名人ではなかったかと思えます。まず自分のことよりも他の人のことを考え、本当にお忙しい方でした。どうぞ安らかにゆっくりお眠りください。そして天国から私どもを見守っててください。

塘 利枝子 (同志社女子大学)

